

Title	<書評>Noel Barnard & Sato Tamotsu METALLURGICAL REMAINS OF ANCIENT CHINA
Author(s)	岡内, 三真
Citation	史林 = THE SHIRIN or the JOURNAL OF HISTORY (1977), 60(2): 299-304
Issue Date	1977-03-01
URL	https://doi.org/10.14989/shirin_60_299
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

Noel Barnard & Satō Tamotsu

METALLURGICAL REMAINS OF

ANCIENT CHINA

岡内三真

I

中国の冶金術、とりわけ銅器鑄造技法については、中国自生説と西方伝来説とが研究の初期段階から今日に至るまで鋭く対峙し続けている。

本書の共著者であるノエル・バーナード氏は、中国自生説を唱える一方の旗頭であり、国立オーストラリア大学極東歴史学科の教授である。本書ができた経緯について述べると、氏が一九六一年に発表した *Bronze Casting and Bronze Alloys of Ancient China* の論考をめぐってひき起こされたさまざまな問題や反響に対して、更に一層緻密な研究を続けて成果を発表する必要がある。そこで、歴大な中国の金属器資料を類型的かつ年代的に収集整理し作表する計画が実行され、共著者の佐藤保氏（現、お茶の水女子大学助教授）がその任にあたった。この中国出土金属器の遺跡・遺物一覧表は、最初は論文に付属する程度のごく簡単な一覧表として、さほど主要なものになるとは予想されずに作業が行なわれたようである。間もなく進められていたカード化の作業は、重要な意味をもつものであることが認識されるに至った。そして、

調査の半ばからは遠大な研究計画へと移行し、十年余の歳月をかけて遂に中国の金属器に関する遺跡・遺物総表と論説とが完成したのである。したがって本書は、バーナード氏によって計画の当初に考えられていた「本論文付「一覧表」の体裁から、「遺跡・遺物総表が主体となって付論がつく」という形に結果としてなっている。それほどに遺跡・遺物総表が重要な位置をしめている。

II

本書の構成は、序、まえがき、論説 *Origins of Bronze Casting in Ancient China* (古代中国における銅器鑄造技術の起源)、出土遺物の分布図、遺跡・遺物総表、各種索引となっている。内容からみると本書は、「古代中国における金属遺物」の表題のもとに、遺跡・遺物総表がデータを提供し、これに基づいて金属遺物分布図が作成され、更にその成果の上に論説が展開されている。

まず序においては、本書作製の契機及び目的が簡潔に記されている。そして遺跡・遺物総表が中国の考古学報告書を利用する研究者にとっていかに有用で価値あるものか、また分布地図は觀念的ではあるが情報を簡潔に要約して図示するもので、中国で考古学の調査研究に従事する者にとって有用であろうとしている。

まえがきにおいては手短かな中国における金属器に関する調査研究史を述べた後に、本書の記述が一九六六年の文化大革命までの調査資料によっていること、更に今後増加するであろう資料は追加して改訂増補する姿勢を示している。そして、遺跡・遺物総表についてその構成や利用上の留意点、及び分類基準などが明示されている。特に、総表への資料収集と整理の方法や問題点を担当者である佐藤氏自身が明らかにし、個別具体的に記して利用者

の便をはかうとしてゐる。しかし全体的にみてそれでもなお複雑であり、この総表を十分に利用し使いこなすためには相当な努力が必要である。

III

論説 「古代中国における銅器鑄造技術の起源」

バーナード氏の論説にうつる前に、中国の金属器に対する大きな解説を試みておく。

金属器の製作は、世界的にみて西アジアで銅製品が作られたのを嚆矢とする。さて、金属器の中国における初現は、商（殷）代にあり、商代は一般に三期に大別され、前期を偃師期、中期を鄭州期、後期を安陽期とする。商代については、甲骨文によって湯王から紂王に至るまで十七世・三十王の治績が明らかに becoming いる。都城は各々、偃師が湯王、鄭州が仲丁、安陽が盤庚によって開かれたと推定されている。偃師、鄭州、安陽のいずれからも金属器（銅器）が出土している。しかし、それより前の龍山文化期や、更に前の仰韶文化期には未だに銅器が発見されていない。したがって、一九五九年に調査された河南省偃師県二里頭の商代早期に属する遺構から出土した青銅製刀子が重要であり、中国の初期金属遺物中でも最も早い例の一つにかぞえられよう。

バーナード氏は、明らかに鄭州や輝県などよりも古く、安陽よりは更に古い時期に属する遺物であると指摘している。この青銅刀の出土は、安陽において何の前ぶれもなく突然に高度な発展を遂げた銅容器が出現すると考えられていた従来の説を覆すものであったとしている。しかしなおこのことが、中国独自による金属器鑄造技術の発明を証明しえたものとはいえないであろう。そう

した点では初現的な銅器の小品と原初的な形態をもつ鑄造址を、各々龍山文化期の遺跡中に探りあて、確認することがまず当面の課題であろうと評者は考えている。それにしても詳細かつ十分な報告のある商代の鑄造址はごく僅かである。バーナード氏は、三ヶ所の鑄銅遺跡を挙げている。一九五六年二月に鄭州市で、商代中期に属する鑄造址が発見された。多くの銅滓と共に刀範や坩堝が出土している。河南省の安陽小屯では、熔鋳炉と鑄造ピットを結ぶU字形の溝が発見されている。類似は小屯に近い苗圃北地でも一九五八年に発掘され、坩堝や範などの破片も数多く出土している。一九五九年には山西省侯馬で鑄造址が発掘され、熔鋳炉の構造はこれによって更に一層明白となったとしている。しかし、鄭州市でも二里崗、人民公園、紫荆山、南関外など、安陽市では高樓荘、孝民屯などで発見されている。そのほか、洛陽市瀾浜、同漢河南鼎城、南陽市十里廟村、輝県琉璃閣などで関連する遺跡・遺物が発見されている。これらとのこまかな比較研究をもう少しつっこんで行なう必要があるろう。ともあれ氏はこれらの遺跡例をふまえて、鑄銅遺跡にみられる熔鋳炉の構造は陶器焼成窯との関係が深いとみている。そして龍山期の陶窯址では摂氏一二〇〇度から一四〇〇度の高温が得られているので、銅の熔解は十分に可能であったとしている。しかし、可能性はあるとしても、事実そうであったか否かを明らかにするまでには至っていないようである。そして安陽で錫のインゴットが出土していることから、別々の鉱石から吹きわけて得た銅と錫とで青銅合金を鑄造したとみている。また、青銅合金に鉛を入れることも、中国での発明が西方よりも数世紀早かったとしている。

さて鄒州の商代遺跡から出土した埴塙は、その形態からみて熔解作業に用いる機能のみを備えているという。各地の商代遺跡で出土した埴塙は、復原すると全て大型であり、安陽の例では約一八六リットル一六五〇キログラム、鄒州の例では七二・五キログラムの溶けた金属を入れる容積があった。(ちなみに、安陽武官村で出土した司母戊鼎は重さが八七五キログラムである)これらの埴塙は西方ヨーロッパの埴塙が小型である点と比較すると、際だった相違を示し、また埴塙の形態も異なるという。また技法の面からみると、中国の鑄造技法は製陶技法・陶窯技法と密接な関連があるとしている。

鑄造法についても述べている。范に直接に文様を彫るかスタンブを捺すかしたもの(直接法)と陶模法とがある。刀子や剣など形の単純なものを作るのに適しているのは直接法である。形の複雑なものは、陶模(母型)から粘土で型をとり、外范と内范とを組み合せて作る。鑄造後に製品をとりだす際に外范は壊されるので、把手のついた類の複雑な器形の范というものは一度しか鑄造には使えないといわれている。また中国では、鑄造後に行なう鍛冶作業とも呼ぶべき加工技術が必要としなかった特異性を指摘している。氏によれば、中国国内の状況を完全にかつ緻密に調査すればするほど、外来説は成立し得ずおのずと中国自生説にむかうという。そして、金属に関する知識は、外部からの影響を受けることなく高度に進歩した窯業の直接的な成果として得られたものである。したがって、鑄造技術者は西洋とは異なり陶器産業と非常に密接な関係をもち、鑄鋼技術の起源からその後の発展に関して一貫して多くの面を陶器産業に負っていたと結論づけている。

中国の鑄造技術の母胎を陶窯および製陶産業に求めて、西方の鑄造技術にみる石器の加工技術に對置している点などは、興味ある指摘といえよう。しかしそれにもかかわらずこの論説をもってしても銅器鑄造技法の中国自生説が万人を納得させるまでには至っていないようである。

IV 分布図

資料を注意深く種類別・年代別に分類して地図の上にドットをうてば何らかの意味を持つ分布のパターンを示すであろう。恐らく、冶金術が外国から伝来したのであれば、そのドットは渡来経路に沿ったものとなり、中国自生の場合ならば中核地域を中心にして四方に広がってゆく傾向がみられることを誰でも予想しうであろう。バーナード氏は、これが遠心的パターンを示し、周辺地域にむかって漸次年代が新しくなりながら広がることを予想して、総表のデータを分布図におとして示している。その結果は以下に述べる如くであるがいくつかの興味深いまた予想もなかった結果が現われているという。その点でこの方法の実験的な一面をよく示しているといえよう。氏によると、金属製品を出土した約四四〇遺跡を含む考古学的なデータは、分布図を作製すると明確な遠心的パターンを形成したという。そして、古代中国の冶金文化は非常に緊密な集中を示す最古の生産中心地をもち、起源は恐らく商代初期の紀元前一八五〇年前後まで遡るとみている。

さて、分布図では二十三の各種金属器についての総図がある。その中で分布図を各時代毎の部分図に分けて示したものが十二枚含まれる。時代毎は種類によって異なるが西周、東周、西漢、東

漢のように四枚に割ることが多い。二十三のすべてに触れることはできないので、項目のみを列挙して参考に供する。

- 1 銅器(商—東漢)
- 2 金器(商—東漢)
- 3 銀器および鉛器(商晚期—東漢)
- 4 鉄器(春秋—東漢)
- 5 車馬器(商晚期—東漢)
- 6 銅劍および鉄劍(春秋—東漢)
- 7 弩機(戦国—東漢)
- 8 銅戈(商—東漢)
- 9 銅帶鉤および鉄帶鉤(春秋—東漢)
- 10 銅鏡および鉄鏡(春秋—東漢)
- 11 銅印章および播錢樹(戦国—東漢)
- 12 銅鐘形器(商晚期—東漢)
- 13 銅鋪首および鉄鋪首(春秋晚期—東漢)
- 14 銅耳杯(西漢—東漢)
- 15 銅奩(戦国—東漢)
- 16 銅博山炉および鉄博山炉(西漢—東漢)
- 17 銅甌(商—東漢)
- 18 銅鬲(商—戦国)
- 19 銅盃(商—戦国)
- 20 銅缶(商—西漢)
- 21 銅盤(商—東漢)
- 22 銅匜(西周—西漢)
- 23 鉄棺釘(戦国—東漢)

各々の図には所見がついており、解説を施している。主要なものにかぎってみることにする。

(1) 銅器出土遺跡分布図 商代早期には河南省を中心にして四遺跡が存在し、商代後期には更に安徽、江蘇、山東、河北、山西、陝西に広がっている。戦国時代には東は吉林、北は内蒙古、西は西海、南は広西から雲南に至る各地にまで及び、西漢代には更に広がる。この結果からみると、中原に中心があったことは指摘するまでもないことである。

(2) 金器出土遺跡分布図 金は商代以前には知られていないが中原にセンターがあり、春秋および戦国早期には象嵌細工に用いている。金工技術は春秋の晩期には呉や楚、越などの南方地域で発展し、郢爰のような鑄造品まで作られている。

(3) 銀器および鉛器出土遺跡分布図 戦国以前の中国では、銀の製作技法は知られておらず、中国以外から輸入され、西漢近くになってはじめて硫化鉛から銀を抽出する技術が知られた。鉛は商代晩期以後から現れて青銅合金に意図的に混入され、銅、錫、鉛の三成分からなる特徴的な合金として用いられた。

(4) 鉄器出土遺跡分布図 新しいより有用なこの金属は、戦国末から前漢の間に非常なスピードで広がった。しかし河北、遼寧、吉林の東北方向には比較的容易に進出するが、西北方向への進展はやや遅く始まっていると指摘している。(これは鉄本来の文字が「鉄」で東方をさす意味を含んでいたらしいことや、匈奴との関係で興味深い現象である)春秋から戦国期にかけての鉄は殆んど鑄鉄であり、鍊鉄、鋼鉄の出現は戦国晩期以後のことである。

(5) 車馬器出土遺跡分布図 内蒙古の南側境界線に沿って五遺跡から乗馬用の器具のみが出土している。それより南の地域では馬車が主体であり、乗馬用の例は少ない。ここでも商代晩期の四遺跡が中原にあり、以後四方に広がって遠心的パターンを成している。

さて以上の5例をみても、遠心的パターンを示したものが多い。では馬車が中国で自生したと断断できるであろうか。少なくとも中心部から四方に広がった点は事実であるとしても、そのみでは中国で自生したという決め手にはならないように思われる。文化の中心地と周辺地の差なども配慮すべきであろう。ともかく、分布図は今ひとつ意図と表現とが十分ではないようであるが、古代中国における金属器の発展を平面的にみるには便利である。

遺跡・遺物総表

金属遺物のみにかぎらず、遺跡・遺物総表のもつ重要性に鑑みて、その構成を示し各々の問題点を指摘しておきたい。

遺跡・遺物総表の構成

- 1 省別の遺跡名 調査経緯 出典
- 2 金属工芸品
- 3 青銅と鉄の鑄造遺物
- 4 青銅容器類
- 5 非金属品
- 6 遺跡と遺物の時代 注記

1の項目には、各遺跡のコード・ナンバー、金属遺物を発掘または発見した遺跡名、その調査年月と調査経緯、出典の順序で記されている。この項で問題となるのは、著者も認めている如く省名はアイウエオ順であるが、県名以下の配列には一定の基準がみあたらない点である。このために遺跡・遺物総表のみによって遺跡名から該当する項目を探し出すにはかなり骨がおれ、対象とする一つの省を全て通覧せねばならない不便さがある。また、県名以下に例えば省名の基準に合わせてアイウエオ順のような何らかの配列基準を設けないと、今後の新出資料を追加するにもやはり困難が生じるであろう。これは第一に改めるべき欠点の一つである。遺跡名や調査経緯などは原報告の記述を採用し、遺跡名にはウェード式の表記法を併用して記し、中国語や日本語をやや解し難い人々にも利用し易いように配慮している。出典のうち雑誌には発行年がついているからよいが、単行本にも発行年をつけるべ

きであろう。そうすれば雑誌と単行本、及び調査年月と報告書発刊年との比較なども一瞥して行なうことが可能となる。この第1項目には上記した多くの情報を納めたために、枠内での記述が少し煩雑になっている。やはり遺跡名は独立した一項にしたほうが都合がよい。

2 金属工芸品は、銅飾品 銅生産工具 銅兵器 弩機 車馬器 錢幣 印章 銅雜器 金器 銀器 (鉛・錫器を含む) 鉄生産工具 鉄兵器 鉄容器 鉄雜器の十四項目に分類している。

分類法にはなお検討すべき余地があるが、このうちで少なくとも弩機のみを取りだす必然性はなく、銅兵器に含めておいたほうがよいと考える。また、銅および鉄の生産工具に分類したものうち、鋸、鋤、鑿、錐、斧などの農具、工具と他の遺物とは区別すべきであろう。そして十四項目中でもこの生産工具の両項は、古代社会を変革させていった生産活動の道具そのものを含むのであるから、将来更に厳密な分類を行なう必要がある。

3 青銅・鉄の鑄造遺物は、鎔範類と鑄造具類とに分けている。この項目は「古代中国における銅器鑄造技術の起源」のために設定されたものであろう。このように特定の事象を細分して抽出すれば、対象となる遺跡や遺物に関するインフォメーションをスピーディにしかも容易に得ることができるようである。

4 青銅容器類は、前述した2の金属工芸品中に分類し含まれるべきものであるが、鑄造技法や銘文の研究に重要な意味を持つために、特に区別して項目を設定したようである。たしかに商・周の銅容器と戦国・漢の銅容器をとおしてみるとその付与された性格がまったく異なる点が明確になる。このように遺跡・遺物総

表のなかには、本来意図されたデータを提供することのほかにも、思わぬ事実気付いたり研究のヒントを引き出すことができる場合がある。ところで、青銅器種類の中に鐘、灯、鏡、炉などを含めていて奇異な感を受けるが、これは中国の伝統的な分類法に従ったものという。こうした点にも自己の分類法を貫ぬく原則が少し欠けているのではないかと思わせる要因がひそんでいる。

5 非金属品の項には、石器、陶器、木器、漆器、玉器、骨器などを含めている。この項目にはあまり注意を払わず、数量や器形等も全て省略されている。しかし論説「古代中国における銅器鑄造技術の起源」との関係でいえば、製陶技術や陶窯址は重要な意味をもつものである。この点、総表と論説との記述が必ずしもうまくかみ合っていないようである。

6 時代と注記の項目は、表の最後に位置しているが、遺跡名の項目と同様に狭いスペースに記述が多く甚だ読みにくい点がある。時代については原報告では商、戦国、漢などのように漠然とした推定である。そこで訂正した著者の考えを「」でくくって東漢〔西漢末〜東漢初・中〕の如くに示している。時期細分に関してみても著者の識見をすることができるといえる。ついで遺跡の性質・構造その他参考となる事柄を記している。

この遺跡・遺物総表について言えば、まず最初に膨大な資料によくも挑戦したものだと言え、しかしその努力と根気の結

果得られた本表は、長く学界の共有財として役立つことであろう。ただ、今までに指摘したような欠点を補われるならば、益々利用し易く有用なものとなるであろう。評者も早速、総表によって車馬具と鏡を抽出して研究に利用し得たが、地名、出典、個数等の点で特に問題となるような誤りには遭遇しなかった。佐藤氏のいうごとくこれは印刷関係者と編集校正にあたった人々の目にもえない努力の賜物であり、チームワークの結晶でもあろう。著者達は一九六六年以降の資料と発刊後に知られるであろう誤りを訂正して、遺跡・遺物総表を更に充実させてゆくという。その成果はまだ大いに期待されるものであり、文化大革命以後の新出資料を加え得るならまさに完璧であろう。

本書はこれのようにおよそ三部から成っており、更に抄訳も加わるために一単行本としては少し体裁をまとめにくいところがあったようである。しかし、著者達の力説するように遺跡・遺物総表の利用価値は大きい。評者は、中国の冶金術に関して確たる自説をもっているわけではないため、特に論説に関しては誤解があるかもしれない。それにもかかわらず、本書の書評を思いついたのは、総表の価値を明らかにする必要ありと考えたからである。

(変形判) 38×30センチ 本文九七頁 分布図八〇頁 総表一三三頁
索引四六頁 一九七五年九月 日産社 三三〇〇円)

(京都大学文学部助手)